

# 社会問題を題材とした写真表現

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 藪口雄也

## 1 はじめに

本研究は社会問題を題材とした、写真作品の表現方法について考察をした。今回はその一部である犬や猫の殺処分を取り上げ、申請者の作品、『コンテナの中の瞳』と『カタチ』の制作過程から研究を進めた。

日本での犬や猫の殺処分数は、申請者が制作を始めた2010年(平成22年)では1年間に204,693匹(環境省統計資料より)、2018年(平成29年)では43,216匹(環境省統計資料より)である。年々、殺処分数は減ってきている。近い将来、殺処分は無くなるかもしれない。しかし、この社会問題は記憶として人々の中に残す必要があると申請者は考えた。

## 2 作品表現について

被写体の撮影方法、また、撮影した写真の表現方法について申請者の作品『カタチ』の制作過程から考察した。この作品『カタチ』は、博士論文で取り上げた『コンテナの中の瞳』と同じシリーズである。

作品『カタチ』は、殺処分後に焼却された犬や猫の骨や装飾品、また、生前に悪くしていた臓器の焼け残りを撮影した作品であり、青森県立三本木農業高等学校動物科学科愛玩動物研究室で活動している『命の花プロジェクト』<sup>(1)</sup>の協力を得て完成した。

今回の被写体は過去に殺処分という問題があり、その結果が今の形である。これらの被写体は純粋にその形や質感を見せることで、殺処分の問題について鑑賞者に訴えかける作品になると考え制作を進めた。ただし、この制作では鑑賞しやすくするために三つの条件を設けた。

(1)大きさを統一した。これらの被写体の大きさは大小様々であり、一番大きい被写体と一番小さい被写体とでは、約5倍の違いがあったからである。

(2)次にライティングの統一をし、被写体の表面に現れる影の角度を統一した。申請者はスタジオでの撮影(ブツ撮り)の経験が少ないため、これらの撮影では知人のスタジオカメラマンに助言を求めた。

(3)被写体の背景に落ちる影が目立つことで、鑑賞時に被写体よりも影を意識してしまう事を防ぐために、背景に黒色のベルベット素材の布を敷く事にした。

これらの被写体は生前どの様な姿をしていたか分からず、また、焼却後の姿も何であるか分からない。形と質感だけが残され、そこには殺処分という事実すら見えてこない。しかし、それらの犬や猫が付けていた首輪の金具から微かに連想する事が出来ると考えた。そこで作品を、臓器の焼け残り→遺骨→装飾品の順番で並べ、最後のページに「これらは殺処分された犬や猫の焼却後の姿である。」と一文を入れる構成にした。

この作品の展示経験はまだ無いが、ポートフォリオに纏め、多くの人に見てもらい感想や意見を頂いた。感想の例を挙げると、「広い範囲の想像ができ、その後、突き付けられる事実は納得できないが、モノを見せられているので納得するしかない」というものであり、それは表現として自分が意図した所であった。

2010年より撮影を始め、制作、発表を続けてきた『コンテナの中の瞳』と新しく制作した『カタチ』は社会問題である殺処分について、表現方法による鑑賞者の心の動きを意識した作品である。犬や猫の傷付いた身体や飼育環境など、一目で状況を把握することが出来る写真ではなく、疑問を持たせることで鑑賞者に考えさせ、さらに被写体に向き合うことで湧き上がる感情が記憶させる鑑賞は、結果的に社会問題とも向き合うことにもなる。

## 3 課題

事実の記録と鑑賞者の記憶がその時代を遺すことは、写真表現の方法にも委ねられる。『コンテナの中の瞳』と『カタチ』をひとつの展示として表現することが今後の課題となる。また、社会問題を扱う作品であるため、多くの人に見てもらう事が重要だと考えている。その為には展示だけでなく、SNS (social networking service) といった、人から人へ発信・拡散される媒体について研究する必要があると考える。

註(1)『命の花プロジェクト』は青森県立三本木農業高等学校動物科学科愛玩動物研究室で行われている活動。殺処分された犬や猫の骨を砕き、土に混ぜ、花を育てる活動